



菖蒲中学校 校訓
一所懸命

令和4年3月25日発行 最終号

菖蒲中学校教育目標

自ら学ぶ生徒

正しい判断力と旺盛な実行力をもつ生徒

心身ともに健康な生徒



ありがとう 菖蒲中学校

校長 落合 統一

校庭の桜も開花し、春めきなごやかなる頃となりました。ご案内の通り、本校は今年度をもって75年の歴史に終止符を打ち、4月からは、菖蒲南中学校と統合し、新校「菖蒲中学校」として新たな第一歩を踏み出します。そこで、最終号となるこの学校だよりでは、本校のこれまでの歩みを振り返ってみたいと思います。

1947年(昭22)。本校は、現在の菖蒲東小学校の地にあった青年学校、菖蒲実修女学校の跡地に新制中学校として開校します。新校舎の建築費の一部は、本多静六博士の指導で秩父に植林してあった杉の木を処分して充てられました。

1957年(昭32)。当時の遠藤長一郎町長が、優秀な教育をするには適正規模の学校が必要であるとして、三箇中学校と統合します。

1958年(昭33)。卒業生から校歌(作詞宮沢章二、作曲下総皖一)が学校に贈られます。この頃、職員室放火未遂事件があった際には、保護者や地域の方が夜の警備をしてくださったそうです。

1947年(昭52)。「床を磨いて心を磨く」清掃活動に取り組み、埃一つなくピカピカに磨きぬかれた廊下の木の床は、当時の菖蒲中の自慢の一つでした。その精神は、いまでも残り、今年度は、「床の輝きは、心の輝き」を合言葉に、生徒たちは、熱心に毎日の掃除に取り組んでいます。

1947年(昭58)。現在の地に移転し、地元の造園家、小山千秋氏の指導のもと、昇降口前にシンボルツリーとしてケヤキの木が植えられました。ケヤキのそれぞれの幹が大空に向かって伸びるように、子どもたちがそれぞれの夢に向かって大きく伸びてもらいたいという願いが込められています。

1987年(昭62)。アメリカのローズバーグ市の中学校との文通から交流が始まり、両校の交流は、のちに菖蒲町とローズバーグ市との姉妹都市の締結へと発展し、この国際交流事業は、現在も久喜市に引き継がれています。

1990年(平2)。文部省の格技指導推進校に指定され、男子は「相撲」女子は「剣道」の研究に取り組み、元大関、琴風の尾車親方が来校され、技術科棟の裏には土俵も造られました。

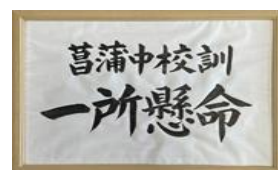
また、この時期に校内暴力事件が起きた際には、学校、PTA、町教育委員会の三者が一体となって学校の平常化に取り組み、PTAの緊急総会には、数多くのお父さん方が集まり、体育館が一杯になるほどでした。そのお父さん方の思いは、今でも、「おやじの会」として引き継がれています。



(裏面に続く)

2011 年(平 23)。校訓「一所懸命」が定められます。『これから迎える先行き不透明な時代を生き抜くには、確固たる信念を持ち、たくましく生き抜く力を培うことが重要です。そこで、菖蒲中学校では、どんな時でも、誰もが言うことができ、実践できる心構えとして、この校訓を定めます。』

これは当時の梓沢恒夫校長先生の言葉です。それから 10 年、この校訓は、すっかり本校に、そして、生徒たちの中に浸透し、心の拠り所となっています。



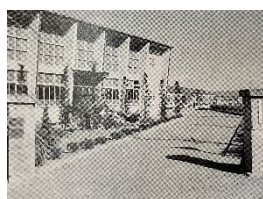
最後に、第 9 代校長である藤本清弘先生が、現在の地に校舎が移転した際、新しくなった校舎に「五つの魂」を吹き込もうと、こう話されました。

『その五つとは、

- 一、学校の内外をいつも綺麗にして汚さないこと。
- 一、緑と花に囲まれた学校を作ること。
- 一、校舎に負けない学力と、体を鍛え体力を作ること。
- 一、全ての生徒が菖蒲中の生徒である誇りを持つこと。
- 一、学校に対する愛情を持つこと。



の五つです。』と話されました。新校「菖蒲中学校」には、どのような魂が吹き込まれていくのか、とても楽しみです。



こうして振り返りますと、本校は、保護者や地域に支えられ、ともに歩んできた 75 年と言えます。改めて、今日までの長い歴史とよき伝統を築き上げてこられた諸先輩方、いつも温かく本校を見守り、ご支援・ご協力を賜りました保護者の皆様、そして、いつの時代にも本校を支えていただいた地域の皆様に敬意と感謝の意を表すとともに、新校「菖蒲中学校」へのより一層のご支援とご厚情をお願いいたします。

＜3 月 8 日（火）閉校式 校長式辞より抜粋＞

終わりに、私事ですが、この 3 月に定年退職を迎え、教員としての 36 年間に終止符を打ちます。教員として最後をこの歴史と伝統ある菖蒲中学校で働けたこと、新校「菖蒲中学校」の設立に携われたこと、そして何と云っても、素直で頑張り屋の心優しい子どもたちとともに過ごせたことは、私の一生の宝物となりました。そして、保護者、地域の皆様には、大変お世話になり、誠にありがとうございました。皆様のご多幸と本校のさらなる発展を願いつつ、最後の学校だよりと致します。